

降誕節第6主日 説教 「主よ、あなたに委ねます」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2023年1月29日

マタイによる福音書 14:1-12

イエス様の物語に触れるということは、触れることで、また、触ればこそ、そこで私たちの記憶の何か呼び覚まされるということです。悪名高きヘロデもそんな一人でありました。「あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている」と御言葉にあるように、イエス様に触れ、そこで思い出したことが洗礼者ヨハネについてであるからです。ただし、「奇跡を行う力が彼に働いている」と言ったヘロデの心には、私たちが感じる安らぎはまったくありません。それは、宴会の座興に洗礼者ヨハネの首をはねたからです。そして、それが、世にいうところのサロメの物語でもあります。ちなみに、サロメの名は聖書のどこを探しても見つけることは出来ません。サロメの名が記されているのはヨセフスの「古代ユダヤ誌」であり、それが聖書の中のこの猟奇的出来事と相まって、サロメの名は世に広まることになったからです。

そこで世に広まったこの大事件の顛末を御言葉から追ってみますと、この大事件の発端はまったくの偶然でありました。それは、ガリラヤの領主ヘロデが自分の誕生日に大勢の客を招き、宴会を開いた時のことです。酒も入り、興に乗ったからなのでしょう。ヘロデは、座興に踊りを踊ったヘロディアの娘に「褒美を取らず、何でも言え」と言ったのです。すると、あろうことか、その母ヘロディアがここぞとばかりに娘を唆し、「ヨハネの首を」と言わせたのです。そして、そのわけは、3節、4節に「実はヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアのことでヨハネを捕らえて縛り、牢に入れていた。ヨハネが、『あの女と結婚することは律法で許されていない』とヘロデに言ったからである」とあるように、つまりは、ヘロデとヘロディアは律法に反する姦淫の罪を犯していたということです。

従って、ヘロデがヨハネを牢に閉じ込めたのは、その口封じのためでもあります。しかし、その殺害までは思い至りませんでした。それは、ヘロデの良心がヘロデをしてそうさせたわけではありません。5節に「ヘロデはヨハネを殺そうと思ってい

たが、民衆を恐れた。人々がヨハネを預言者と思っていたからである」とあるように、洗礼者ヨハネの首をはねることは自らの立場を危うくすることでもあったからです。ただ、そうした煮え切らないヘロデの態度にヘロディアは常々苦々しく思っていたに違いありません。ところが、そこに思わぬ好機が訪れたのです。それが、「褒美を何でも取らせよう」とこのヘロデの一言です。こうしてヘロデは悩みつつも自らの体面を保つために、意図しない形で洗礼者ヨハネの首をはねることになったのです。

このように、ヘロデの心が穏やかでなかったのは、イエス様に触れることで自らの犯した罪に恐れおののいたからです。ただ、このヨハネ殺害にまつわる一連の出来事は、ヘロデ個人の問題に止まらず、現代にも通じる様々な問題をいくつも見出すことができるように思います。先ず一つは、叔父と姪が通じたという姦淫の問題ですが、ヘロデとヘロディアの問題は律法云々以前に、当時であっても、今日であっても、犯すべからずものでもありました。ですから、それによって民衆の支持を失うのは当然のことでもあります。ただ、気になるところはそれだけではありません。ヘロデとヘロディアの関係が叔父と姪という関係を超えたものであったことは、御言葉が記すとおりであります。権力を欲しいままにした人物の中で、ヘロデと同じような関係性に陥った者がおりました。それはアドルフ・ヒトラーです。ヒトラーは姪であるゲリと特別な関係にあったと言われているのですが、ただ、それが具体的にどのようなものであったのかははっきりと分かってはおりません。そのため、様々なことが憶測をもって語られているのですが、ただ、ゲリが自ら命を絶つてまでヒトラーとの関係性を終わらせようとしたのは事実であり、多くの人にはそこにただならぬものを見るのです。そして、状況は異なりますが、そうした関係性を小説という形で詳らかに語ったのが島崎藤村でもありました。

そして、二つ目がヘロディアとその娘の関係です。二人が親子であることを思えば、それがいかに歪んだものであるかは誰

の目にも明らかです。特に、「褒美を取らず」と権力者に言われ、「ある者の首を」と自分の娘に言わせる親はなかなかいないように思います。また、母親に言われたからといって、躊躇せず「首を」と言える娘もいないようにも思うのです。ですから、異常とも言えるこの親子のやり取りを見て、身のすくむ思いがするのですが、ただ、ここまで極端な例はそうそうないとしても、親子関係におけるこうした思考停止の状況は、つまりは、ある人のコントロール下に置かれ、異常なことすら異常だとは思えずにいる状況、それがいわゆる共依存と呼ばれている問題でもあります。そして、そこに宗教という仮面が被されることによって起こることがいわゆるカルト問題と言われていることです。このように、この子のため、この人のため、というこの思考停止がいかほど危険なものであるかは、私たちもよくよく心に留める必要がありますが、けれども、ヘロディア親子のしたことについて、また別の見方をすれば、それはどういうことになるのでしょうか。それは、自分たちの暮らしを守るためであったということです。それゆえ、そこには生活防衛上仕方なかったとの理屈が成り立つわけですが、しかし、娘を利用してまでその思いを遂げようとするヘロディアの姿から見えてくるものは、世界は自分のためにあり、自分が世界の中心であるという、その独特の価値観です。そして、その理屈の中心にあるのが「この子のため」ということでもあります。それがヘロディアの王宮で繰り広げられた出来事でありました。ただし、それは、当時を振り返るなら、決して珍しいことではありません。似たような凄惨な出来事はローマの王宮でもしばしば見られたことであり、ですから、当時のローマ世界に生きた人々は、ここに記されていることがどれほど好奇の目で見られたとしても、もしかしたら、私たちほどには驚くことはなかったのかもしれない。

そして、この中で最も多くの人々の関心を引くのは、洗礼者ヨハネとサロメの関係性です。聖書では、この二人の関係性についてはまったく語られてはいませんが、そこを文学的手法を駆使して見事に描き出したのが「幸福な王子」「ドリアン・グレイの肖像」などを記したオスカー・ワイルドでありました。そして、その彼が記した戯曲がこの聖書箇所を題材とした「サロメ」でもありますが、その中で彼は洗礼者ヨハネに向けられたサロメの歪んだ情愛

を描くのです。けれども、その愛がヨハネに届くことはなく、そこで彼女がしたことは、ヨハネを我がものにするということです。その首をはねさせたのはそのためでもあります。そのクライマックスとして描かれているのがヨハネの首にサロメが口づけをする場面なです。多くの人々はこの場面に強く引きつけられるのですが、それは、指を広げた手で顔を覆い、キャーと言ったのぞきこむような、そんなかわいらしい理由からではありません。見たい、見たくないというよりも、この凄惨な光景に心がどうしても向かってしまう、ここに人間の心の澱んだものを見る思いがするのです。

そして、最後が洗礼者ヨハネについてです。悪いものは悪いと、死を恐れずにヘロディアを告発するヨハネの姿は、私たち信仰者に一つの範を示すものです。そして、それが神の義に生きるということでもあるのでしょう。そこで、ある年代以上の方たちが思い浮かべるのはデートリヒ・ボンヘッファーの名前です。それは、ヨハネと同じように、牧師としてナチスドイツに抗い、立場が揺らぐことをも恐れずに悪を告発し、結果、ナチスドイツ敗北の三週間前に処刑されることになったからです。ただ、かつてあれだけ取り上げられたボンヘッファーの名は、最近耳にすることが本当に少なくなってきたように思います。ここに時代の移り変わりを思うのですが、ただ、人の名が忘れられることはあっても、その背後にある、より恐ろしい出来事の記憶が失われることには深い憂慮を覚えます。それは、かつて世代を超えてあらゆる共同体で共有されていたものが戦争の記憶であり、ボンヘッファーの名前が歴史の中に埋没すると同時に、戦争の記憶も失われてしまったら、後に残るものは何なのか、それは、バラバラにされたむき出しの個人でしかなく、まさに今私たちの置かれているそのままの状況を示しているようにも思うのです。

ですから、最も恐ろしいことは歴史に対する無関心であります。ヨハネ殺害を巡るこの物語の中で、私たちが今日に通じる様々な問題をそこかしこに見ることができるのは、登場人物の歴史に対する無関心を見るからです。つまり、ヨハネ以外の全員が自分のことしか考えていないということです。しかし、そこで私たちが忘れてならないことは、そのような中であって私たちはイエス様に触れながら、この物語に聞いているということです。では、イエス様に

触れている私たちの、そこから呼び覚まされる記憶とはどんなものなのでしょう。それは、眉をひそめ、その登場人物を非難するだけで終わるものではありません。また、その反対でもありません。洗礼者ヨハネの毅然とした態度は、信仰者である私たちにとっては一つの範を示すものでもあります。イエス様との繋がりが切れたところで、いくらヨハネは偉い、偉かったと言ったところで、そこで感じるものは、甘くもなければ苦くもない、無味乾燥なものではないからです。それゆえ、そうしたものが私たちの記憶に止まることはありません。私たちがイエス様に触れて、そこで呼び覚まされる記憶とは、そういう身勝手なものではなく、喜ばしいものであり、痛々しいものであり、深い悲しみを覚えるものでもあるからです。そして、そこで大切なことは、それが共同体において共有されてきたということです。それは、イエス様に係わる私たちの記憶は個人的なものではなく、イエス様を頭とする教会の記憶でもあるからです。従って、それはイエス様に関してということ限定されるものではありません。このサロメの出来事もそうですし、十字架と復活の出来事もそうです。聖書の御言葉に記されていることのすべてが教会という共同体の記憶なのであり、それゆえ、共同体が共同体であるためにも、私たちはこれらの記憶を体に刻み込む必要があるのです。それは、これらの記憶の共有こそが共同体としての私たちの証しでもあるからです。

ですから、イエス様に触れるという体験は私たちにとっての共通体験であり、それゆえ、個々の受け止め方、ものの見方は違ったとしても、その見ている景色は同じであるということです。従って、私たちがこうして手にしている聖書は、そうした私たちの記憶を束ね、編集したのもでもあり、そこで、先日の新聞に記されていたある詩の一節を思い出すのです。それは、「遠くのできごとに、人はうつくしく怒る」という言葉であります。私はこの一節から、御言葉に記されていることが私たちにとっての遠い日の記憶ではなく、今のことであり、それゆえ、私たちの将来に深く関わっていると、こう教えられたように思ったからです。つまり、私たちは涼しい顔で御言葉に聞いているわけではないということです。ただだから、この聖書の御言葉は私たちの今と将来に係わるのであり、私たちがここから文学的な関心や政治的な関心と呼

び覚まされるのはそのためです。

しかし、私たちがこうして集められている教会という共同体はそのような個々バラバラな関心によって築かれてきたものではありません。私たちの共同体に記憶されていることは、ヨハネの最期をヨハネらしいと言えるものでもあります。凄惨な末路を辿ることになったこの洗礼者ヨハネの最期を、私たちがどうしてヨハネらしいと言えるのか、それは、ヨハネが勇気ある告発者であったからではありません。私たちが、ヨハネらしさと呼んでいるものは、ヨハネという個人を見ているからではなく、このヨハネと深い関わりにあるお方、ヨハネと同じように凄惨な最期を迎えたお方、このイエス・キリストというお方を通して、私たちがヨハネを見ているからです。ただだから、今日の御言葉はその最後で、十字架を予見させるものとして「ヨハネの弟子たちが来て、遺体を引き取って葬り、イエスのところに行って報告した」と語るのです。

このように、ヨハネらしさというものは、イエス様に触れてこそそのものであり、それは、ヨハネが間違いなく、その最期にイエス様を見て、このイエス様に触れていたからです。しかし、その一方で、ヘロデもヘロディアもその娘もどうであったのか、ヨハネが最期を迎えた時、もし、その時、彼らがイエス様に触れていたとしたら、このような記憶を私たちが記憶に留めることはなかったはずですが、彼らの常軌を逸した行動はそれゆえのことでもあります。ところが、そのヘロデが後日イエス様に触れることでヨハネのことを思い出すに至ったのです。このことはつまり、ヨハネ殺害の出来事は、イエス様の御心の外にある出来事ではなく、その御心にしっかりと刻まれていたということです。天の御国について語ったこれまでのことはいえ、ヨハネ殺害の出来事は、毒麦の譬えの中にあることであり、同じ一つの網の中でのことであったということです。ですから、ヘロデの王宮にいる人々は皆、そういう意味では不信仰であったとも言えるのですが、ところで、不信仰といえ、この直前で聞いた聖家族もイエス様と同郷の人々も、同じように不信仰であると言われたのです。それゆえ、ここでは信仰者としての範を示すのはヨハネだけということにもなるのでしょうか。なぜなら、信仰とは狭いものであり、厳しいものでもあるからです。自分の気持ちを脇に置き、場合によっ

ては自分を捨て去ることすら厭わないものでもあるからです。世の多くの人たちにとって見えてくる信仰の世界とは、まさしくそういうものであり、そして、そう思うのは私たちも同じだと思うのです。

では、こうしてこの日の御言葉を記憶する私たちは、このヨハネらしきなるものを本当に身につけていると言えるのでしょうか。そこで私たちの思いつく答えは、否、ということでもあります。ならば、私たちは、ヘロデやヘロディア、そして、サロメと同じだということでしょうか。彼らのしたことは、その罪が行き着く先の悪です。悪魔の所業と行っても差し支えないものです。ですから、そこには私たちとの明らかな違いがあるのですが、けれども、ヨハネとも明らかな違いを感じるのです。そのため、私たちはいつもどこか信仰に自信が持てずにいるのですが、それがまさにその罪ゆえのことだと思うのです。ですから、私たちがヨハネらしきなるものを思い込もうとしたり、また、演じたりするのはそのためです。時に私たちが原理原則に拘るのは自信があつてのことではなく、自信がないからです。それがいわゆる原理主義の本質でもあります。その反対に世俗にどっぷりとつかって、言い訳を繰り返す内に思考停止の状況に陥り、すべてを絡め取られ、身動きすらできなくなってしまう、世俗に流されることの恐ろしさは、気がつかないうちに信仰という大切なものを見失ってしまうということでもあります。ならば私たちはどうすればいいのか、私たちにとっての一大事はここです。

私たちは生まれながらの信仰の達人ではありません。そして、それは、イエス様もヨハネも同じです。人として生まれ、人として生きるということは、初めからすべてが整っているわけではないからです。けれども、長いその歩みの中でその違いが際立つことになるのです。ですから、私たちがヨハネらしきと言っているものも、そういうところで現されるものだとも言えるのでしょう。そして、そこで大切なことはイエス様に触れるということです。つまり、私たちがヨハネらしきと呼んでいるものは、この繰り返しであり、積み重ねです。立場や命が脅かされた時、理屈を盾にとって自らの力で身を立てようとするのではなく、また、なし崩しに世にあわせ、また流されるのでもなく、イエス様に触れ、イエス様の喜ぶその場所に止まり続けること、そして、それが許され、約束されているところ

が私たちが今こうして置かれている場所でもあるのです。まただから、私たちはその人個人の問題をその人だけに押しつけることはしません。イエス様に触れているからです。

しかし、そうであるからといって、私たちはその人に成り代わってその人の人生を生きることにはできません。私たちがヘロディアにならないためにも、その人に成り代わろうとしてはならないのはそのためです。なぜなら、成り代わることはイエス様の上に自分自身を置くことでもあるからです。ですから、そのためにも、私たちは、らしき、ということへの拘りを捨てて、イエス様に触れている経験と記憶を日々積み重ねて行きたいと思うのです。そして、それが、共にイエス様に触れ、共に御国へと歩み続ける私たちの歩みでもあるからです。

ただ、この、らしきへの拘りを捨てるということは、時に自分を見失うということでもあります。それゆえ、とても恐ろしいことでもあります。私たちが原理主義に陥り、世俗主義に流されるのは、この恐怖から逃れようとするからです。だからこそ、その時、私たちは、喉から手が出るほど欲しいと思うものに安直に手を伸ばすのではなく、分からないなら、そこで何をすればいいのかを考えたいのです。そして、そこで私たちのすべきことは、イエス様と神様にすべてをお任せすることです。この、すべてを任せていいと思えるものが私たちには与えられているのであり、そして、この任せて安心、委ねて大丈夫なものを私たちは信仰と呼んでいるのです。ヘロデもヘロディアもサロメも、そして、洗礼者ヨハネも、それぞれの姿は私たち人間の一つの可能性を現すものでもあります。その中で私たちはいかなる可能性を信じ歩めばいいのか、選択肢はいくつもあるように思えます。けれども、こうして信仰が与えられている私たちは、いかなる選択肢を選ぼうとも、この私とイエス様は深く関わり、この私と人生を共に歩んでくださっているのです。イエス様に触れる度に私たちが思い起こすことはこのことです。主は共にいます。そのことをもう一度心に深く留め、新しい歩みをはじめたいと思います。祈りましょう。